

令和 2 年度 学校評価報告書（総表）

1 学校の概要			
学校名	筑波大学附属駒場中・高等学校	校長名	北村 豊
幼児・児童・生徒数（R3.3.1 現在）	中学校 369 名 高等学校 486 名	学級数	中学校 9 高等学校 12

2 教育目標等	
① 学校教育目標	「自由闊達の校風のもと、挑戦し、創造し、貢献する生き方をめざす」の理念のもと、生徒自らが学ぶ態度の涵養に努め、国際社会で活躍できるトップリーダーの育成をめざす。
② 学校経営方針	学校教育目標達成のため、本校の伝統的な全人教育を基盤に、第 2 期中期目標・中期計画で本学附属学校が定めた 3 つの拠点（「先導的教育拠点」「教師教育拠点」「国際教育拠点」）構想の成果を活かし、第 3 期中期目標・中期計画で掲げている「グローバル人材育成」と「インクルーシブ教育の推進」を積極的に実践する。先導的教育拠点として、SSH 研究開発「国際社会に貢献する科学者・技術者の育成をめざした探究型学習システムの構築と教材開発」（第 4 期 4 年次）の研究を推進し成果を発信する。教師教育拠点として、本校の教育活動の発信と教員免許状更新講習の充実を図り、中等教育の発展に寄与する。国際教育拠点として、生徒の海外派遣や国内での国際交流を通して、国際社会で活躍できる人材の育成をめざす。
③ 重点目標	<p>「国の拠点校」「地域のモデル校」として、本学附属学校の 3 拠点構想の成果を活かし、本学との連携の下、以下の 4 プロジェクトを中心に全教職員で取り組んでいく。</p> <p>① 生徒を多角的視野でみるために「生徒の可能性の発掘」プロジェクト 本校の教育実践が生徒の成長過程に及ぼす影響について分析・考察し、より生徒理解の一助となる情報を提供する。</p> <p>② 学びとカリキュラムのデザインプロジェクト 授業をはじめとした学習活動とカリキュラムに焦点化して「駒場らしい学び」のあり方を探究する。</p> <p>③ 協働・コラボ推進プロジェクト 地域や他の学校・施設、企業、OB、大学など外部と筑駒生との協働・コラボレーションを生むようなきっかけづくりを行う。</p> <p>④ 教育のグローバル化検討プロジェクト 教育内容をグローバル化時代にどう対応させていくのかを考え、国際交流の調査と研究、留学、海外進学など国際教育拠点の観点で可能性を検討する。</p>

<p>④ 前年度（令和元年度）の成果と課題</p>	<p>左の4つのプロジェクト①～④（前年度に設定）を中心に、生徒の人格形成、国の拠点校としての先導的な教育の実践、教育活動の発信と社会貢献、教育のグローバル化の調査・研究と国際交流などを全校体制で推進してきた。その成果と課題は以下の通りである。</p> <p>【成果】</p> <p>①携帯電話・スマートフォン・情報サービス等の利用に関するガイドラインを策定し実施状況を分析し、情報リテラシーの検証を行った。また、校内のユニバーサルデザインについて調査研究し、次年度への課題解決の方法を検討した。</p> <p>②実践された道徳科授業の情報を集約し、全教員で共有して次年度への課題を検討した。SSH や SGH の他校の探究カリキュラムを研究し、本校の探究カリキュラム構成を検討した。ICT 環境とその活用について検討した。大学入試改革に関連した学校行事の実施時期についての情報収集と研究、互いの授業を研究し合うオープンクラスや自主研修会の実施を通して、学習コミュニティの形成をめざした。</p> <p>③本校関係者による「筑駒アカデミア」、目黒区教育委員会との連携講座、卒業生の講演を実施するとともに、進路懇談会や学年講演会などにおける招聘 OB のデータを収集・整理し、教育成果の発信と社会貢献を図った。インクルーシブ教育の実践として「三浦海岸共同生活」等、附属特別支援学校との交流及び共同学習を実施した。</p> <p>④生徒の相互交流（台中第一高級中学）、海外派遣生徒の受入事業（韓国）、国内での国際交流（本学教員研修留学生との交流、イングリッシュルーム）及び各プログラムの教育的効果分析のための評価枠作成と評価を実施し、教育のグローバル化への対応を検討した。</p> <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・SSH 研究開発事業の3年目の成果の発信と次期 SSH の事業の検討を進める。 ・教育のグローバル化とインクルーシブ教育を推進するシステムの検討を進める。
---------------------------	--

<p>3 重点目標達成についての総括的評価</p> <p>先導的教育では、SSH 研究開発の柱である探究型学習の教材開発と「理科課題研究」や学校設定科目である「課題研究」の実践を進めた。今後の課題は、「理数探究」と「総合的な探究の時間」の導入に向けた高校カリキュラムの検討やその評価法の確立、「GIGA スクール」構想を推進する環境整備とコンテンツの充実、最終年度を迎える SSH 研究開発の次年度以降の対応などが挙げられる。</p> <p>教師教育や社会貢献では、第47回教育研究会（社会科・理科・英語科）、SSH 数学科教員研修会をオンライン開催した。また、地域に貢献する「筑駒アカデミア」公開講演会と公開ワークショップをいずれもオンラインで実施（講演会は録画配信も実施）した。「筑駒アカデミア」は、持続可能な財政基盤の確立が課題である。</p> <p>国際教育では、SSH 事業として実践してきた台中市立第一高級中学との生徒研究交流会をオンラインで開催し、姉妹校協定を5年間延長した。また、以前から交流のある釜山国際高校が主催するオンラインプログラムに参加し、いずれもこれまでの関係を維持することができた。研究発表等のプレゼンテーションスキル向上を目的とした「イングリッシュルーム」も、上記プログラムに先立ってオンラインで実施された。</p> <p>これら拠点事業を推進する上で不可欠な財政的基盤の確立と老朽化した施設の改善が依然として大きな課題として残っている。</p>

4 令和3年度の学校課題

国立大学附属学校の新たな活用方策等で示された附属学校の存在意義である「国の拠点校」「地域のモデル校」を踏まえ、先導的教育・教師教育・国際教育の開発と推進、及び長期的視野に立った教育環境の改善を重点目標に定める。

SSH 研究開発においては、国際社会に貢献する科学者・技術者の育成をめざした探究型学習の教材開発と実践、主体的な探究活動をするための基礎力育成カリキュラムの開発と実践、探究型学習を実践するためのプログラム開発とサポート体制、探究型学習システムの開発と他校への発信・共有に取り組む。

また、新規校内プロジェクト①～④（第1年次）について、全教員で取り組みながら、筑波大学附属学校の第三期中期目標・中期計画で掲げている「インクルーシブ教育」と「グローバル教育」を積極的に推進していく。

① コロナ時代の学校生活プロジェクト：コロナによって影響を受けた教育活動や生徒・教員のメンタル面に目を向け、必要となるサポート体制や環境の構築を目指す。

② 駒場流 不易と流行の教育デザインプロジェクト：「人（教員・生徒）」、「モノ（教材・教具・ICT 機器）」、「コト（カリキュラム・理念・コンテンツ）」の相互作用を明らかにしながら、本校が培ってきた「学び」の本質を抽出する。

③ 駒場レガシーの継承と活用プロジェクト：本校はいかなる「力」を育ててきたのかを言語化し、発信するため、若葉会（同窓会）および卒業生との連携をより意識的に行う。また、地域貢献の観点から、公開講座・講演会や目黒区との共催講座の運営も担う。

④ 対外交流再構築プロジェクト：海外の学校や他附属校との交流の在り方、その教育的効果を改めて整理し、交流プログラムの再構築と新たな可能性を提案する。

5 学校課題に向けての具体的な取り組み

SSH 研究開発（第5（最終）年次）では、研究の完結および発展期ととらえる。第4年次までの研究で得られた成果とともに、開発した各種プログラムや教材、カリキュラムを、他校でも活用できるような形での普遍化に取り組む。主体的な探究活動をするための基礎力育成カリキュラムの開発と実践においては、数学オリンピックセミナーの拡充、理科特別講座を通して習得した知見・技術について検証、情報科プログラミング学習の教育課程編成などを行う。また、探究型学習を実践するためのプログラム開発とサポート体制では、高大連携や卒業生を活用したプログラム、社会と連携したプログラム、国際交流・国際科学コンクールを支援したプログラムなどの評価を行う。さらに、これらの取り組みを通して、探究型学習の達成度を測る評価基準についてまとめる。

次に、4つのプロジェクト毎に具体的に取り組む内容を以下に挙げる。（①～④は「4 令和3年度の学校課題」と同じ）

① オンラインで実践した授業や中止・縮小を余儀なくされた学校行事など、2020年度の実践経験を共有し、21年度以降における効果的な活用を提案する。オンライン学習や分散登校となった学校生活が生徒や教員に及ぼした影響を心理的側面からとらえ、「メンタルケア」や「働き方改革」に関する議論の促進につなげたい。

② 授業研究や教師教育に関する知見の収集・実践・共有を目指す。中高の6年間を見通した探究的な学びの構想とマネジメントの研究。道徳教育の実践事例の蓄積と運用方法の改善。ハードウェア的な側面からとらえたICT環境の整備と効果的な活用法の提案などを行う。

③ 本校が育てる「力」の検討と発信を行う。OBによる生徒対象の進学・進路懇談会のデジタルコンテンツ化、若葉会（同窓会）人材バンク事業委員会と連携した、多様なニーズにも耐えうる進学・進路に関する情報の蓄積と共有・活用を推進する。また、発信の場となる筑駒アカデミア公開講座・講演会、目黒区との共催講座の運営を行う。

④ これまで実践してきた対外交流プログラムについて、その成果と課題を改めて精査し、持続可能な取り組みとして発展させる。台中・釜山の各学校との国際交流。他附属とともに取り組むインクルーシブ教育。SSH指定校やユネスコスクールとして交流プログラムなどが対象となる。

6 成果物一覧（出版物・紀要・書籍等）

・筑波大学附属駒場中・高等学校編（2020）『筑波大学附属駒場論集第60集』筑波大学附属駒場中・高等学校（教員の個人・教科グループ等による研究成果は、上記論集 p.213～220 に記載）

・筑波大学附属駒場中・高等学校編（2020）『平成29（2017）年度指定スーパーサイエンスハイスクール研究開発実施報告書第四年次』筑波大学附属駒場中・高等学校

・「Posters of Mathematics 数学科課題研究ポスター集 Since 2015」（2021.3）

・第47回教育研究会報告書（2020）、筑波大学附属駒場中・高等学校（2020.11.21 オンライン開催（本校教員の他、教員・大学院生など263名がオンラインで参加））

・生徒の活動一覧（国際科学オリンピックでのメダル獲得など多数）

学校評価（自己評価）報告書（項目別表）

令和2年度

学校名

筑波大学附属駒場中・高等学校

項番	評価項目	具体的評価結果
1-1-3	体験的な学習や問題解決的な学習、児童生徒の興味・関心を生かした自主的・自発的な学習の状況	体験的な学習として、中1と高1ではケルネル田圃での稲作実習を実施した。中2、中3、高2において例年実施されるフィールドワークを中心とした実践的な学習は、宿泊を伴う行事の中止に伴い実現できなかった。高3では年間を通して「総合発表」に取組み、文化祭でその成果を発表した。また、主体的な探究学習として、中3では「テーマ学習」、高2では「課題研究（ゼミナール形式）」、高3では「課題研究（個別研究）」を実施した。さらに、教科が主体となって企画した「水俣実習」、「福島フィールドワーク」、「城ヶ島野外実習」なども実施した。
3-2-1	自ら考え、自主的・自律的に行動でき、自らの言動に責任を負うことができるような指導の状況	本校の学校行事は、これを計画・準備していく役割を担う委員会を伴う。構成する委員が互いに共生・協働する「場」が自主的・自律的な行動を自然と促し、リーダーシップとフォロアーシップを涵養する。令和2年度においては、ほとんどの学校行事が中止か規模縮小を余儀なくされたが、不自由な環境の中でも価値の高いコンテンツを作成・提供しようと試行錯誤する「場」は受け継がれ、オンライン環境を活かしたこれまでにない形のアウトプットも生まれた。
6-1-1	特別支援学校や特別支援学級と通常の学級の児童生徒との交流及び共同学習の状況	課題研究の一つである「ともに生きる」では、筑波大学附属大塚特別支援学校小学部・高等部、附属聴覚特別支援学校のほか大学・企業、卒業生等の協力のもと、さまざまな障がいを持つ方々や関係者との交流や研修を通して、学習を進めた。
7-1-2	校務分掌や主任制等が適切に機能するなど、学校の明確な運営・責任体制の整備の状況	新たな定員（研究員）の確保、教務補佐員の活用、外部業者への委託、卒業生の活用を進めるとともに、各分掌・校内プロジェクト、学級担任が、部長や主任を中心に各部署で責任を明確にした役割分担を行い、持続可能な組織の整備を進めている。
12-1-4	大学、附属学校教育局と連携した多様な学習内容・学習形態などに対応した整備の状況	Google Classroom、Microsoft Teams、Zoom Cloud Meeting等のアプリケーションを導入し、オンライン学習の実現・充実に向けた運用システムを構築した。また、創立70周年募金活動を行い、多様な学習形態に対応できる特別活動室の設計・建築計画を大学、附属学校教育局と連携しながら進めている。
12-1-5	大学、附属学校教育局と連携した学校教育の情報化の状況	専門性を有する司書を継続して雇用し、学術コンテンツ・学習リソースが活用可能な図書メディアセンターの実現に努めた。また、Google Classroom、Microsoft Teams等のアプリケーションを用いた授業コンテンツのアーカイブ化を一部試み、オンデマンドで視聴できるように整えた。さらに、家庭におけるICT環境を補うべく、Wifiルーター等の貸し出し体制も整えた。

14-1-3	先導的教育研究	SSH 研究開発事業では、探究型学習の教材開発と「理科課題研究」や学校設定科目である「課題研究」の実践を進めた。いずれも「型」にはまらない対話や「ハンズオン」を中心に据えた、主体的な活動を通して力が身につくことを期待している。また、主体的な探究活動を支える基礎力育成を目的として、理数以外も含め、各教科が専門家による特別講座（講演・実習等）を企画・実施した。
14-1-4	教員養成・教師教育	教育実習を実施するとともに、第47回教育研究会（社会科・理科・英語科）、SSH 数学科教員研修会をオンライン開催し、授業の様子を含めた日頃の教育活動や SSH で得た成果や恩恵を社会に発信した。例年、会場として企画・運営・講師を担ってきた教員免許状更新講習は実施されなかった。
14-1-5	国際交流・国際貢献	SSH 事業として実践してきた台中市立第一高級中学との生徒研究交流会をオンラインで開催した。また、長年交流のある釜山国際高校が主催するオンラインプログラムに参加し、いずれもこれまでの関係を維持することができた。研究発表等のプレゼンテーションスキル向上を目的とした「イングリッシュルーム」も、上記プログラムに先立ってオンラインで実施された。
14-1-6	社会貢献	「筑駒アカデミア」事業として、本校の人材（生徒・教員・卒業生・保護者）を活用し、地域（世田谷区や目黒区）住民を対象にした公開講演会と公開ワークショップをオンラインで開催した。例年実施してきた、地域の小学校や筑波大学と連携協定を結んでいる茨城県大子町の小学校等への出前授業はコロナの影響により実現できなかった。